たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報　No.22　平成3年6月30日

縄文時代後期の遺物群
No.194遺跡の土器・石器

No.194遺跡の遺物から

上に掲げましたものは、現在調査中のNo.194遺跡から発見された遺物の集合写真です。一ヵ所でまとまって発見されたものではありませんが、とりあえず復元できたものを紹介します。

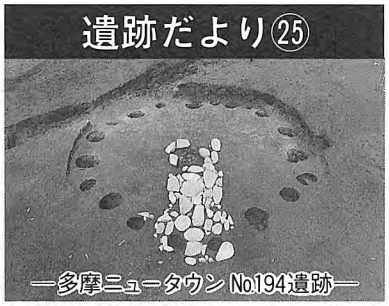
縄文時代後期の土器は、中期のものに比べると文様は簡素・優美・繊細であるといわれます。土器の厚さも薄く、指ではじくと〝チン〟と軽い音が聞こえます。

これら土器の中には、外面あるいは内面ともに黒色処理しているものが少なからずあります。土中から掘り出した当初は光沢を帯び、鈍い黒みをもっていた土器も、二十世紀の風にあたると、急速に光沢を失い生彩を欠いていくようです。

ところで遺跡に立つと南西の方向に丹沢山塊の霊峰大山が一望できます。およそ三千五百年前にも同じように雄姿を縄文人たちに見せていたこの大山とは違い、私たち現代人の掌に載った土器は、生活のための器ではなく、古代の歴史を語るための貴重な資料として活用されて行きます。

（山口慶一）

遺跡だより㉕

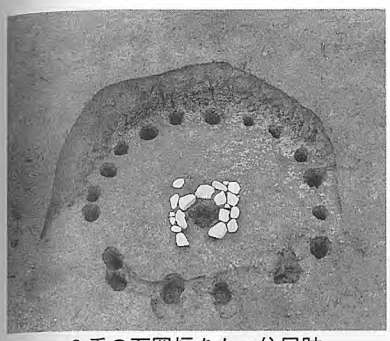


炉部から入口にかけて敷石をもつ住居跡

今回報告するNo.194遺跡は町田市小山町に所在し、多摩丘陵から相模原台地に向けて東南に張り出す丘陵の尾根の先端部に位置しています。

調査は、今年の2月中旬から開始し6月上旬現在で縄文時代の集落の調査を概ね終了しました。縄文時代後期前葉から中葉にかけての竪穴住居跡・柱穴群・墓坑、貯蔵穴などの遺構などによって構成されるムラのほぼ全容を明らかにすることができました。

竪穴住居跡は、南側斜面を中心に13棟が斜面肩部、標高150ｍの等高線を取り囲むようにして検出されました。住居跡群の内側、尾根頂部にある狭い平坦面からは、数個体の土器（深鉢・浅鉢・鉢・注口土器）の小破片が出土し、縄文後期に降下したと思われる火山灰によって埋没している土坑（貯蔵穴もしくはゴミ穴と思われる）やロームを主体に埋め戻され、1個体ないしは2個体の深鉢、鉢が出土する土坑（墓坑と思われるもの）や柱穴群が検出されました。これらの遺構群が一体となって、当時、森を切り拓いて開かれていたムラを構成していたのです。



2重の石囲炉をもつ住居跡

13棟の住居跡群の配置は小規模ながら環状の様相を呈しています。住居跡の構築方法はいずれも壁際に柱穴をもつものが主体を占めていますが、定型的な柱穴を持っていないものも2棟存在します。

他の11棟の住居跡のうち堀之内Ⅱ式期のものと思われる6棟は、炉から入口部にかけて石が敷かれていたと思われますが、2棟を除き他の4棟は、他の住居跡の敷石などに転用したためか、検出時にはすでに抜き取られていました。残存していた2棟の敷石中からは、石棒・石皿・磨石なども発見されています。

時期は前後しますが、堀之内Ⅰ式期に営まれたと思われる住居跡が4棟検出されています。平面形が隅丸長方形を呈していたと思われる住居跡が2棟あります。このうち1棟は、長軸が約9ｍ程もある大形のものです。他には張り出し部をもった平面形がほぼ正方形のものと、炉の周囲に2重の石囲をもつ小形の住居跡が検出されています。また加曽利ＢⅠ式期のものと思われるほぼ正方形の住居跡が1棟検出されています。

敷石を抜かれた住居跡

前述したように、尾根頂部の狭い平坦面を中心に土坑群が検出されていますが、その中には、多摩丘陵では、初めて検出された袋状土坑（断面の形からフラスコ状ピットとも呼ばれます）も1基ではありますが含まれています。

これらの遺構の覆土の中や遺構外の包含層からは堀之内Ⅰ式期から加曽利ＢⅡ式期にかけての土器やそれに伴うと思われる石器が出土しています。

土器は器形の上からは深鉢・鉢・注口土器などがあり、文様は沈線を主体とする繊細なものが多くあります。

石器は、有茎の石鏃が数点みられるほか、定角式磨製石斧と分銅形打製石斧が主体を占めます。磨製石斧は全長が1.2㎝と小形のものもあります。道具以外の遺物としては筒形土偶頭部片、有脚土偶脚部片、石棒なども出土しています。

このように、本遺跡は比較的短期間の居住があったムラと思われ、後期の小規模な環状集落です。今後の整理作業を通じ、当時のムラの様子をさらに明らかにしてゆきたいと考えています。

（山口）

フラスコ状土坑（貯蔵穴）

遺跡だより㉖

和同開珎

先行調査の成果から

多摩ニュータウンNo.71遺跡

当遺跡は八王子市堀之内に所在する丘陵上の遺跡で面積は約八千六百㎡ですが平坦な部分は少なく、大半が緩やかな斜面となっています。なかでも南側の大栗川に面する斜面には、縄文時代前期の良好な包含層が検出され、多数の土器片や石器が出土しています。

また、この南斜面には、奈良時代の住居跡が一軒だけ検出され、日本で最初に鋳造された貨幣とされている「和同開珎」が一枚出土しています。

住居跡は東西3.1m、南北3.7mの隅丸長方形で、壁の高さは最も残りの良い部分で56cmでした。北側の壁の中央にはカマドが設けられています。和同開珎は、このカマドの右側のソデが崩れた粘土に埋もれた状態で出土しています。

和同開珎の出土は多摩ニュータウン地域では初めてで、近隣でも、府中市の武蔵国府関連遺跡、町田市金井町の木倉・入谷戸遺跡、横浜市港北区森戸原遺跡など、出土例は限られているようです。

（千田利明）

No.949遺跡

町田市小山所在のNo.949遺跡は、南にのびる尾根の西側斜面地にあり、先回紹介したNo.947遺跡とはこの尾根の東側と西側とを分けあった位置関係にある古墳時代後期の粘土採掘坑です。

No.947遺跡では数少ない遺物も本遺跡では比較的多く検出されており、土師器甕20個体以上、土師器杯4個体のほか、木製品として、鋤5本、掘り棒10本以上、ヘラ状に加工したもの4本、加工のみられない径1m、長さ1mほどの棒状品、藁製品として、草鞋3（一足と半足）のほか、束ねた藁や、約50cm四方にわたって敷物のように敷き並べた敷き藁が三ヵ所から検出されています。

甕には、火を受けていないもの、加熱で変色したり煤が付着したものがあり、水甕として、あるいは煮炊き用として竪穴住居跡出土の甕と用途を同じくするようですが、採掘坑内に火を使った顕著な痕跡や、カマドを構築した痕跡はなく、課題を残します。

農具としては珍しくない鋤や掘り棒などの木製品もこの遺跡では、粘土採掘用の工具として検出されており、粘土をどんな道具で、どのように採取したのかがあるいは草鞋の検出で、当時の人々の粘土採掘に従事した姿形を、具体的にイメージとして彷彿とさせる遺跡です。

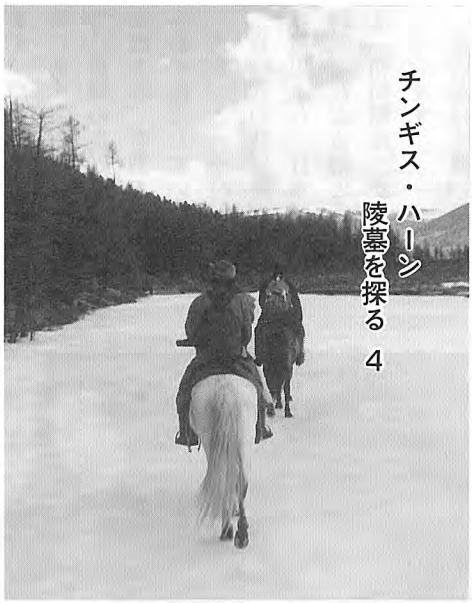
（宇佐美義春）

No.949遺跡　草鞋検出状況

No.949遺跡　鋤出土状況

No.949遺跡　甕・掘り棒・敷き藁

チンギス・ハーン陵墓を探る 4



凍結した川を渡る隊員

前号にも述べましたが、「元朝秘史」に関する地名の考証や伝承に重きを置くモンゴル側研究者と、日本側研究者との間には、その調査方法に関する考え方で、大きな開きがありました。そこで、3年計画の1年目はお互いの立場を尊重し前半部をモンゴル側が、後半部を日本側が中心となって調査を進めることになりました。

標高2362mのヘンティー・ハーン山周辺の山地帯が前半部の調査地です。山の斜面にはカラマツ、五葉松の一種が混生し、広い谷には草地と灌木帯が続くという風景が見られました。今、ここでマンモスゾウでもみることができれば、まさに旧石器時代の光景を見るようです。実際にはヘラジカが生息していたので、かなり近い風景といえるでしょう。

問題の調査は3日も続く吹雪に悩まされたり、晴れた日には雪を掻き分けながら行なわれました。また、移動のための道路はほとんどなく、さしずめ日本でいえば、日光の戦場が原や釧路湿原のようなヤチボウズのある場所を凍結期に四輪駆動車で走っているようなものです。しかし、伝承の土地に行ってみると玄武岩によって地下深くから地表面まで構成され、とても中世の技術では掘削の不可能な場所であったりなどして調査の実はなかなか上がりませんでした。

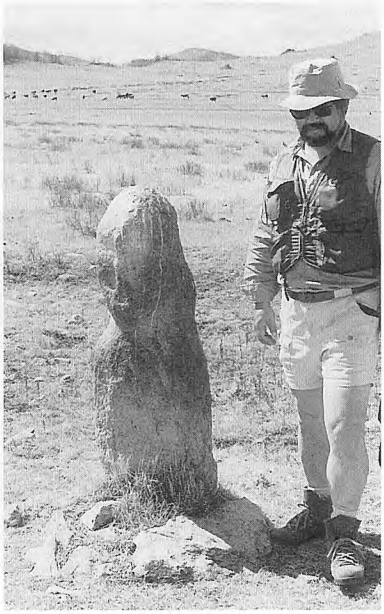
遺跡らしい遺跡には出会うことのなかった山岳地帯の調査でしたが、ドント・オボーというヘンティー・ハーン山の中腹にあった寺跡は非常に興味のある遺跡でした。この寺は1930年代に社会主義革命の動きの中で廃絶されましたが、その創建の年代については不明な部分が多いのです。一応、モンゴル側の学者は17世紀と19世紀に寺が建築されたと述べていましたが、現地に立ちますとその情報を鵜のみにはできませんでした。

雪の林中での踏査

山の中腹にある平坦面にはオボー、つまり森林地帯では樹木を、草原地帯では石を三角錐状に立てかけたり、積み上げた信仰上の道標が祀られていました。今も遙々と下の村落から人々がお参りしているようです。紙幣や貨幣、酒の空きビン、飴など、様々なものが供えてあります。その周辺は樹齢百年程の落葉松の林となっており、とてもこの百年や二百年の間に建築物があったとは信じられません。

現地の倒木穴などからは屋根瓦や漆器の破片などが採集できます。この瓦のタイプはあのモンゴル帝国の都となったカラコルムの遺跡から出土した資料に類似しているのです。もし、これが13世紀のものであれば、非常に興味のあることです。

（千野）



突厥の石人

文化財講座〈18〉

縄文時代と人々 (6)

縄文人と祭り

祭りとは本来、神に供物をし、神と人との交渉を具現する儀式とそのお祝いとして行なわれる逸脱した乱痴気騒ぎという二つの性格から構成されるもので、時代や社会に応じて変化していくものです。

現代における祭りのイメージは文化祭・記念祭・祝賀祭などにみられるようにお祝いとして催される歓楽的な部分すなわち、どんちゃん騒ぎやご馳走などが強調されておりそのために祭りの背景にあるべき神の存在は形式化してしまっているものが多くなっています。

縄文時代においても竪穴住居内や集落内の広場などで家族単位または集落単位の祭りが盛んに行なわれていたようで、代表的なものとしては通過儀礼と狩猟儀礼をあげることができるでしょう。

前者は現代と同じように誕生・成人・結婚・死といった人生の節目に行なわれるものですが、現代以上にマジカルな面が主要な役割を担っており、その方法などは現代とはかなり異なっていたようです。

具体的には成人の際に歯を抜き取る抜歯や死者の葬送の際に遺骸への顔料（ベンガラ）の散布・墓付近での焚火などが行なわれていました。

また、縄文人の生業において主要な柱となっていた狩猟はその不確実性から豊猟祈願のための儀礼が行なわれていたと考えられます。

遺構としては山梨県金生遺跡や岩手県門前貝塚で好例が検出されており、前者ではイノシシの幼獣・若獣の焼けた骨が百体以上出土した土坑、後者では弓矢の形を模した配石遺構が発見されています。遺物では動物（イノシシなど）の形をまねて作った土製品や狩猟場面が描かれた土器が東日本各地で出土しており、これらの遺構・遺物は縄文時代における狩猟儀礼を裏付けているものといえるでしょう。

この他にも祭祀的な遺物として、土偶・土面・石棒・石剣・ミニチュア土器などがあり、縄文人が様々な目的に応じて祀りを行なっていたと予想されます。

縄文時代の精神生活は、考古学の主たる研究対象が「もの」であるという性格上、それに残される部分の少ない精神生活の復元は、考古学の中でも難しい分野であるといえます。

しかしながら、遺跡の中から発見される祭祀的な遺構・遺物は、祀りなどの精神的営みの力を借りて、当時の不安定な採集経済を打開し、様々な災いを除こうとした縄文人の姿を想像させてくれます。（西沢）

永井先生、伝小山城跡を見学

当センターは設立十周年を記念して、文化講演会を三月十六日㈯にパルテノン多摩・大ホールで開催しました。万葉集の中から、女性の愛と行動について、特に東歌を中心に当時の女性の生き方や、広く政治や経済活動を含めて作家の永井路子先生に講演していただきました。当日は八百五十名の市民の方々の参加を得て、永井先生の、時にはユーモアを交え、はっきりとした口調の講演に皆熱心に聞き入りました。

今から二十年前に唐招提寺の解体修理に伴う発掘調査を見学して以来の考古学との触れ合いからお話しいただきました。さらに、万葉集の現代的な意義、特に女性の経済的な立場の強さは現代に極めて似ていますが、家族構成や結婚のあり方に違いはやはりみられることなどについてお話しいただきました。

講演する永井路子先生

今年度 安全衛生管理方針

4月1日に今年度の安全衛生管理方針が発表されました。最近5年間におけるセンターの災害の減少については一進一退であり、以前にも増して安全衛生管理の強化をはからなければなりません。

昨年十月に発足した安全衛生委員会と当部門の実行機関ともなった安全衛生推進会議のもとで災害ゼロをめざして一層の充実強化をはかります。

スローガン

「みんなで考え
みんなで築こう災害
ゼロの明るい職場を」

映画「森と縄文人」の完成

当センターでは昨年、設立十周年を迎えました。これを記念する行事の一つとして、映画「森と縄文人」の製作が行なわれました。

縄文時代の森はどのような森であり、その中でどのような生活を行なっていたのかについて、多摩ニュータウン遺跡群および日本の主要な縄文遺跡の遺構、遺物を紹介しながら説明します。それと共に、その縄文の森が如何に世界の中でも豊かな森であったかを強調するものです。

映画と講演の会

設立十周年記念映画の初公開に合わせ、当センター小薬一夫調査研究員による講演「縄文時代の集落」が6月1日（土）に行なわれました。

当日の参加者はセンターのこの種の催しでは最高の二百八名の市民の皆様方に集まっていただきました。受付と共に人はみるみるまに増え、椅子が不足し、立ち見の方も出ました。また、当日の会場はクーラーもまだ入っていないために暗幕に外気を遮られ蒸し風呂のようでしたが、皆さん熱心に聞いていました。

今回の映画と講演の内容については広く宣伝していませんでしたから、なぜ、このように多くの市民の方々が集まっていただいたのか、分析が必要と考えています。しかし、映画の題名の「森」が現代の環境問題などの高まりの中で見なおされつつあります。これと縄文人との関連に深く興味がもたれたものと考えられます。

講演する小薬調査研究員

海外からの研究者

一月十九日～二十二日

モンゴル人民共和国からツェベンドルジ、メネス氏の2名の考古学者が日本考古学に関する研修を受けるために来所されました。No.496遺跡の旧石器時代の調査を実際に経験しました。

六月三日　アメリカ・スミソニアン研究所サックラー美術館から、シアーズ氏ら5名の一行がセンターへ視察にみえました。来年、この美術館で開催されます日本の考古展の準備の為の視察旅行です。来年、彼らの手でどのような展示がされるのでしょうか、楽しみです。

スミソニアン研究所員の視察

人の動き

4月一日付けで杉岡総務課長が多摩教育事務所、斉藤経理係長が建設局に転出されました。新しく、府中青年の家から瀬川総務課長、広尾高校から富安係長が着任されました。同日、調査研究員として五十嵐彰、小林裕、澤田秀美、鈴木美保の4名が採用されました。

市ケ谷・調布 事務所の開所

尾張藩上屋敷遺跡と調布・飛田給北遺跡の調査がいよいよ開始されました。その事務所の開所式が、それぞれ六月十九日、二十四日に行なわれました。

発　行
(財)東京都教育文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市落合1－14－2
☎ 0423-74-8044
平成3年6月30日